

ウィリアム・フォークナーの文学再考

——社会的・歴史的批評の観点から——

Socio-Historical Reassessment of
William Faulkner's Literary Achievement

山下 昇

◀あらゆる文学はたとえどれほど神話性が弱められていても、私たちが政治的無意識と呼んできたものによって支えられているにちががなく、それゆえあらゆる文学は、共同体の運命に関する象徴的思考として読まねばならないのだ。➤ (Fredrick Jameson, 70)

1

William Faulkner (1897-1962) の文学のイデオロギー性を論じる時、寺沢みずほの著書(1992年)は一つの方角を示している。寺沢は『英語青年』フォークナー特集号(1997年)において、フォークナー作品に対する自らのスタンスに変化がないことを確認して、フォークナーが「分かりやすい」作家であると主張している。寺沢によれば、フォークナーの世界は次のようなものである。

彼は、南北戦争での南部の敗北と南部の大義の摩滅を悲嘆の極みと捉える立場に立っている。南部が敗北し、人間には抵抗しようがない滅びの宿命がすでに始まっているが、まだ完全に滅びきってはいないモラトリウム(モラトリアム)の時期——「南部社会が神に見放されて」いるが、まだ「神が姿を消していない」時期——、これが彼のほぼすべての小説の状況であり、主人公の男は滅びの歯車を止めようと死に物狂いの努力をするし、この努力がセックスと強烈に関わっていることが一大特徴

となっている。(12)

そしてその世界について次のように評価している。

フォークナーの世界が、現在の基準から言えば、人種差別的、性差別的であることは明白である。私は、普遍的な価値観を振りかざす立場には立たない者であり、自己の世界の神話化も文学の貴重な機能であると考えている。研究者とするなら、その神話が現在の人権概念から見れば差別的であることを認識した上で、神話を解き明かすことで、その裏にあるものの見方や苦悩や美意識を明確に理解できるようになるのだと考える。(13)

寺沢の上の指摘やこの主張は、一面的には的を射ているが、フォークナー文学総体に関しては単純化し過ぎている。フォークナーも人の子であり、時代と社会の制限のなかで創作を進めた作家である以上、当然に時代と社会のイデオロギーに影響され、個人的なイデオロギーを有していた。そのことに必要以上に目をつむる必要はない。しかし、事はそれほど単純ではない。文学作品は作家のイデオロギー表現の単なる道具ではないし、彼のモダニズムの技法は、思想を隠蔽する単なる粉飾でもない。また、作家のイデオロギーもあいまいであったり、矛盾を含んでいたりする。また、作者のリアリズムが成功していれば、作品は作者の意図やイデオロギーを越えて現実を正確に反映することにもなる。

フォークナー批評の難しさは、ちょうど Mark Twain の場合とよく似ている。*Adventures of Huckleberry Finn* (1884) における黒人像や女性像が現在の人権概念から言えば差別的であることは否めないが、かと言って全く人種差別的・女性差別的と結論づけることも単純化の謗りを免れない。フォークナーの場合も、人種差別的・女性差別的であることは否定できないが、そのような枠をはみだすような思想や表現を作品に見いだすことも可能であり、彼を Thomas Dixon や Margaret Mitchell と同列に論じることはできない。

フォークナーのイデオロギーは、時代がそうであったように、二つの矛盾する力の葛藤の中にあり、アムビヴァレントである。彼が偉大なりアリストであり、現実をより深く、より正確に表現しようとすればするほど、イデオロギーにはゆらぎが生じ、その表現は多義的にならざるを得なかったと言える。こうした点を念頭において、フォークナー文学の社会的・歴史的批評として、Richard Godden, Barbara Ladd, Daniel Singal らの研究書を取り上げ、*Absalom, Absalom!* (1936) を中心に考察をすすめる。

2

ゴドンはフォークナーが、寺沢が主張するように、滅びゆくプランター階級の代弁者の立場から作品を書いていることを立証しようとしている。その際に彼が手がかりとするのは、労働形態と人種問題である。

ゴドンによれば、『アブサロム』の解釈においてとりわけ問題となるのは1791年から1933年までの南部の長期に渡る「革命」である。この「革命」とは労働形態の革命であり、それに伴う社会構造の変化、人間関係および意識の変化のことである。具体的には依存労働制から賃金労働制への移行である。1930年代に南部はようやく賃金労働制に移行し、近代化を成し遂げるが、その道は平坦ではなかった。それは「革命」を推進しようとする力と、それを押し止めようとする「反革命」の力とのせめぎあいであり、その「反革命」の努力がいかに執拗で、系統的で、強力なものであるかということが描かれているのが、フォークナーの文学世界であるというのが、彼の主張である。

ゴドンは、南北戦争を含むこの期間が奴隷制やシェアー・クロッピング制の依存労働 (dependency labor) の時代であり、その労働形態が従属的・家父長的・人種差別の人間関係を規定していたと述べる。南北戦争敗北後も南部においてはこの依存労働制を保持しようとする反革命的時代であったことを彼は指摘している。しかし1933年の農業調整法 (Agricultural Adjustment Act) の施行によって南部も遂に賃金労働制 (wage labor) に移行することになる。

フォークナーが生まれて成長した時期は the Radical era (1889-1915) と呼ばれる時代で、ミシシッピにおいてはもっとも抑圧的なジム・クロウ活動が行われた時である。この時期に、白人のマスターと黒人奴隷女との人種混交という奴隷制時代のパラダイムから、白人女と黒人男の人種混交へとパラダイム変換がおこなわれる。黒人男は “the black beast rapist” (23) であるという *sociosexual fantasy* が白人の意識を支配したのがこの時代である。その結果、リンチが多発したことも歴史的事実である。また、この時期になって旧南部社会の美化がはじまり、あちこちに南軍兵士像が建立される。ミシシッピ大学構内の南軍兵士像が1906年、オクスフォードの広場の兵士像が建立されたのが1907年である。フォークナーが1897年、『アブサロム』のクエンティンが1891年の生まれとされているように、2人はほとんど同世代である。人種の関係がもっとも緊迫し、歴史的な反動傾向の強まったこの時期に、作者と作品の主要人物双方が生まれ、育っていることは注目に値する。

周知のように、『アブサロム』においてサトペンは1823年にハイチに行き、27年に奴隷反乱を鎮めている。その後1833年に彼はヨクナパトーファ郡に現れ、ハイチから黒人たちを連れてきてサトペン屋敷を作り上げる。しかしこれが歴史的事実に反することは夙に指摘されている。

1791年にサン・ドミンゴに起こった奴隷反乱は1804年にハイチ共和国の成立をもたらした。それ故、歴史的には1827年にハイチには奴隷もプランテーションももはや存在していなかったはずである。では一体何故作者はこのような不自然なことを小説のなかで描いたのかというと、南部白人がいかに「革命」を恐れる心性にとらわれていたかを表現するためだと言う。

ゴドンによれば、「ハイチ」という言葉は南部においては「革命」と同義であり、ハイチから連れてきたサトペンの奴隷の存在は、いつ起こってもおかしくない奴隷反乱の潜在的可能性を示唆するための変則的な擬制 (an anomalous archaism) であるという。奴隷たちに対するサトペンの対応は一般的なプランターのものではない。ハイチから連れてこられた奴隷たちは彼と対等の「解放された」黒人たちである。サトペンがこの黒人たちと格闘し、勝利することによって彼らを従わせるというのは、彼が農園制維

持のためのレッスンを人々に示しているのだ。奴隷制を維持するためには、常に「革命」を抑圧し続けなければならないことを示すのが目的であるという。

また、1827年のハイチにおける反乱抑圧とは文字どおりあり得ない反革命の企てであり、史実に反してまで反革命の企てを作者が描くのは、南部人が、例えばこの場合はコンプソン将軍のような人が、いかに人種反乱抑圧と南部農園制の保持の望みを強く持っているかを描くためであるという。あるいは1930年代において作者がこうしたものを描く背景には、迫りくる「革命」への南部白人の抵抗があるといってよい。ちなみにゴドンは、New Dealは南部にとって“Second Civil War”であると述べている。(115) なお、フォークナー自身がルーズベルトのニュー・ディール政策に批判的であったことは周知のことであり (Williamson, 265)、その意味ではフォークナーにとってもこれは一種の「南北戦争」であった。(更に、人種問題・公民権運動は文字通り第2の「内戦」となる。)

小説においてサトペン物語が語り直されるのは1909-10年においてだが、作者がその物語を書くのは1934年である。この前後の南部における労働形態の変化はめざましい。以下に簡単にまとめてみる。1934年綿花の過剰生産により価格の下落がおこり、ニュー・ディールによる生産調整が行われる。その結果綿花畑の53%が作付けをやめる。1933年から40年までの間に小作が25%以上減少する。廃業や小作人の移動によって社会構造の変化が起きる。34年には南部小作人組合 (STFU) が結成される。1909年には農園の70%以上が小作人や分作人によって耕されていたが、30年から40年の間に黒人分作人は「排出」(outmigration) によって約4分の1減少する。実際、1938年までに小作人の移動は“a black diaspora”と呼ばれるように「脱出」“exodus”となっていた。(126)

『アブサロム』が書かれたのはこのような時代を背景にしてであり、この作品はその頃危機に瀕していた地主階級の依存労働と依存精神についての小説である。30年代には、いずれにしろ、労働の基盤としての「依存」という形態は時代遅れのものとなっていた。そもそも、南北戦争の敗北によって農園主たちは、土地は残ったものの、労働力を失い、本来ならば北

部のように賃金労働制に移行しなくてはならなかったのである。しかしながら、この革命は実行されず、地主階級による反革命によって、小作あるいは分作という形態をとって、依存労働制は1930年代まで維持されるのである。この点を描いたのが『アブサロム』であるというのがゴドンの主張である。

この点に関して Harold Woodman は、新南部 (the New South) はブルジョワ社会へと変貌を遂げていたように思われているが、実際のところは南北戦争後の南部は近代化に対して敵対的なイデオロギーや社会的政治的構造を支持していたと述べている。(554) 『アブサロム』が描き出しているのはそのような現実である。

3

ラッドは作家と登場人物との間に距離をおいている。フォークナーが創作を始めた時代を、彼は、「1890年から1930年は人種統合の可能性に対する白人のヒステリックな反応の時期」(139) ととらえ、“white racist paranoia” と呼んでいる。その一例として1920年以降に国勢調査から“mulattoes” というカテゴリーがなくなったことをあげている。したがって、この時期の文学にとって人種が焦眉の問題となるのは必然である。

『アブサロム』におけるチャールズ・ボンを語る語り手たちの立場の相違に注目して、ラッドはフォークナーの歴史意識の確かさを指摘している。南北戦争前に生まれたローザにとっては、ボンの死はサトペンの非情によるものであり、戦後世代であるコンプソン氏やクエンティンの理解とは異なっている。また、コンプソン氏にとっては、ボンは同世代のような親近感を抱く対象であり、ボンの死の原因が黒人の血であることに氏は言及していない。

クエンティンはボンの黒人の血に言及するのだが、これは1880年代後半以降に盛んになる “U. S. Imperialism and racist idea of race and culture” (145) のせいであるとラッドは主張する。これがコンプソン氏の物語がニュー・オリンズにおけるボンに焦点をあわせているのに対して、クエンテ

インの物語が黒人のハイチに焦点が移動する理由である。「国外における帝国主義と国内における極端な人種差別主義の同時発生」(148)が、米西戦争(1898年)によって獲得したキューバ、プエルトリコ、フィリピンなどの有色植民地への対応に呼応しているのは偶然の一致ではない。その意味でクエンティンはそのような帝国主義的イデオロギーの犠牲者でありその手先でもある。また、人種差別主義のレトリックの最たるものは黒人の男は白人の女を求めているというものであり、『アブサロム』のボン殺しはその線上に位置するものである。その意味で、「クエンティンは想像力の失敗、旧南部の物語を書き直すのに失敗する非力の実例である」(154)と指摘されている。また、この頃は黒人リンチの頻発した時期であり、1908年のネルス・パットン事件などが、*Light in August* (1932)等の彼の作品に影響を与えたことは想像に難くない。

1910年には黒人の89%が南部に住んでいたが、30年までに10%以上ポイントが下がった。あるいは黒人白人を問わず、人々が移動し始めたため、出自が明らかでない者に対する猜疑心が否応なしに高まった。『八月の光』のクリスマスはもちろん、バーチ(ブラウン)さえも黒人と疑われる。

これに関連して Doreen Fowler は、サトペンさえローザによって黒人と同一視されていることを指摘している。ラカンを援用したこの批評の中で、彼女は、「その存在の意味を読みとることを拒否することによって、語り手たちはボンを謀議して抹殺しようとしている。」(96)とさえ述べている。

4

シンガルはフォークナーの立場を traditionlist と modernist の葛藤と見なしている。サトペンの物語解釈については、作者が、南部人の「騎士的存在」というものが・・・実は旧南部のフロンティア的人物に過ぎないことを示す”“alternative myth”(198)を示しているとして、サトペンが原型的プランター像であるという従来の一般的解釈とは異なる見解を彼は提示している。

またこの作品の手法に言及して、物語は一連の語りの連鎖を通して、「生きた物語」(215)として読者に届けらること、それを可能にしているのは、南部の口承の伝統とモダニストとしての認識論の融合であると述べる。それぞれの語り手の認識については、ローザのアプローチは19世紀的、コンプソン氏は“the post Victorian skeptic” (216) で、旧南部の崩壊を諧謔と皮肉をもって語るシュリープはモダニストであるフォークナーの立場に立っている、“a post-Victorian sensibility” (219) であるクエンティンは次第に不承不承ながらモダニストになっていくと指摘している。人種抑圧の雰囲気が強まっている南部社会の1936年において Jim Crow を Jim Bond に置き換えよう（人種統合を進めよう）という作者の試みは評価されるべきであるとシンガルは結んでいる。

なお、これに関連して、*The Unvanquished* (1938) の評価について、作者は pro-Confederate bias を幾分和らげているものの、old planter class の道徳的優越を讃えており、『アブサロム』より後退しているとシンガルは見ている。その理由については、traditionalist としての自己と modernist としての自己の精神的バランスを回復する必要性が作者に働いたのだらうと述べている。

更に *The Wild Palms [If I Forget Thee, Jerusalem]* (1939) については、一貫して作者が抱いていた文化的・知的ディレンマへの最も決定的な反応であると評価する。また、*The Hamlet* (1940) は、Snopes phenomenon を初めてモダニストの目から見たものである (245) と意義づけている。

5

このように、ニュアンスの違いはあれ、いずれの批評家も、フォークナーの文学がアメリカ南部の時代と社会（歴史）を映し出すものであることを、異口同音に唱えている。ただ、やっかいなのは、作者が作品とどのような距離をとったのかということである。フォークナーが単なるリアリズムの作家なら話はもっと簡単だと思われる。だが、彼は実際モダニストであり、モダニズムの手法で、モダニズムの作品を書いた。それは彼にとっての現

実認識が、一面的ですまされないものだったからである。複眼の思考やアナクロニズムの手法が、直截的に現実を描いていない、イデオロギー的にあいまいであるということは一面の事実だが、そのような戦術によってしか捉えられない現実や世界が現れてきたのが、この作家が生きて活躍した時代だったのだ。

Works Cited

- Faulkner, William: *Absalom, Absalom!* (Vintage International, 1990)
寺沢みずは『民族強姦と処女膜幻想』(御茶の水書房、1992年)
——「フォークナーの分かりやすさ」『英語青年』1997年11月号
Jameson, Fredrick: *The Political Unconscious* (Methuen, 1981)
Godden, Richard: *Fiction of Labor: William Faulkner and the South's Long Revolution*
(Cambridge U. P., 1997)
Williamson, Joel: *William Faulkner and Southern History* (Oxford U. P., 1993)
Woodman, Harold: "Sequel to Slavery: The New History Views the Post Bellum
South," *Journal of Southern History*, vol. 43, no. 4 (Nov. 1977)
Ladd, Barbara: *Nationalism and the Color Line in George W. Cable, Mark Twain, and
William Faulkner* (Louisiana U. P., 1996)
Fowler, Doreen: *Faulkner: The Return of the Repressed* (U. P. of Virginia, 1997)
Singal, Daniel J.: *William Faulkner: The Making of a Modernist* (The U. of North
Carolina P., 1997)

※本稿は1997年12月22日、関西大学においておこなわれた、関西フォークナー研究会フォークナー生誕100周年記念シンポジウム「フォークナー研究の回顧と展望」での発表に加筆したものである。